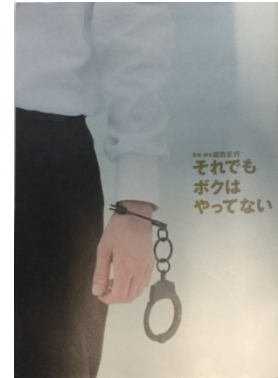


それでもボクはやってない

今から 10 年前、2007 年に上映された映画だ。パンフレットが手元に残っており、久しぶりに手にとった。これには「わけ」がある。それは後にしよう。まずはパンフレットに掲載「周防正行 監督コメント」から。



これまでの映画もそうであったように、普段の生活の中で、僕が驚き興味を持ったことを皆に伝えたいというのが映画を発想する出発点です。今回は、ある新聞記事に興味を持ったことが発端でした。それは一審で有罪判決を受けた痴漢事件の被告人が二審で逆転無罪を勝ち取ったことを伝えていました。そこから取材が始まったのですが、取材を進めるうちに、「被告人がどう闘ったか」というばかりでなく、裁判そのもののあり方について多くの疑問が湧いてきました。疑わしきは罰せず、という言葉聞いたことがあると思います。犯人であるという確かな証拠がない



限り、無罪である (NOT GUILTY) ということです。ところが現実には、疑わしきは罰せよ、としか思っていないような判決があることを知りました。しかし、それはもしかすると、今現実には日本に生きている多くの人たちの気持ちの反映かもしれません。多くの人にとって、「疑わしきは罰せず」よりも「疑わしきは捕まえといて」の方が本音に近いのかもしれません。しかし、疑われるのが自分自身だったらどうでしょう。

『十人の真犯人を逃すとも一人の無辜を罰するなかれ』 人が人を裁いてきた歴史の中から生まれた法格言です。この刑事裁判の原則について今一度考えてみたい。そう思ってこの映画を作りました。

10 年前、この映画を観てから満員の地下鉄に乗るとき、できるだけ手を上に挙げるようにした。なんだか怖くなったことを覚えている。それと「裁判」というものに関心をもった。レポートでも紹介したが、2002 年 9 月 11 日、名古屋地裁で証言台に立ったことがある。忘れもしない私の「9・11」だ。空港関連開発訴訟の原告（住民）側証人として意見陳述した。最近、3 月 14 日にも名古屋地裁に行った。瑞穂区白竜町のマンションに抗議する住民が不当に逮捕された事件だ。共謀罪の先取りといえる事件であり、刑事裁判の現実を知るうえで、10 年前の映画を思い起こした。

(2017 年 4 月 20 日)